Hitotsubashi

平成30年度 一橋大学公開講座

ミュージアムへの招待
大学院から始める学芸員資格

Language and Society

平成30年6月23日(土)

Gensha

Curator

MUSEUM

主催　国立大学法人 一橋大学
後援　国立市、小平市、立川市、国分寺市、
府中市、武蔵村山市各教育委員会

平成30年度　一橋大学公開講座

ミュージアムへの招待
大学院から始める学芸員資格

平成30年6月23日(土)

主催　国立大学法人 一橋大学
後援　国立市、小平市、立川市、国分寺市、
府中市、武蔵村山市各教育委員会

平成 30 年度一橋大学公開講座
ミュージアムへの招待――大学院から始める学芸員資格

日時｜6 月 23 日（土）13:30～16:40
場所｜一橋大学 西キャンパス 本館 21 教室
定員｜250 名

プログラム

13:30～	開会挨拶	尾方 一郎（一橋大学言語社会研究科長）
13:35～	趣旨説明	小泉 順也（一橋大学言語社会研究科准教授）
13:45～	発表 1	喜多崎 親（成城大学文芸学部教授） 「一橋で学芸員？ 設置の経緯と独自性の模索」
14:05～	発表 2	成相 肇（東京ステーションギャラリー学芸員） 「「放牧地」で学んだこと」
14:25～	発表 3	大橋 菜都子（東京都美術館学芸員） 「大学と美術館の往来」
14:45～	発表 4	小泉 順也 「学芸員養成における混在と対等の地平」
15:05～	休憩	
15:25～	ミニトーク	趙 亜男（言語社会研究科修士課程） 「留学生の視点から見る学芸員資格科目」 市村 有樹子（社会学研究科博士後期課程） 「博士後期課程から学芸員資格に取り組み気づいたこと」 奥津 憲聖（横浜みなと博物館学芸員） 「キャンパスとミュージアム　地元・横浜への三角測量」
15:50～	パネルディスカッション及び質疑応答	
16:35～	閉会挨拶	坂井 洋史（一橋大学言語社会研究科教授）
16:40	終了（予定）	

－目　次－

ご挨拶
尾方 一郎（一橋大学言語社会研究科長）　・・・・・・・・・・・・・・ 2

言語社会研究科における学芸員養成の概要
小泉 順也（一橋大学言語社会研究科准教授）　・・・・・・・・・・・・・・ 3

一橋で学芸員？ 設置の経緯と独自性の模索
喜多崎 親（成城大学文芸学部教授）　・・・・・・・・・・・・・・ 7

「放牧地」で学んだこと
成相 肇（東京ステーションギャラリー学芸員）　・・・・・・・・・・・・・・ 9

大学と美術館の往来
大橋 菜都子（東京都美術館学芸員）　・・・・・・・・・・・・・・ 11

学芸員養成における混在と対等の地平
小泉 順也　・・・・・・・・・・・・・・ 13

留学生の視点から見る学芸員資格科目
趙 亜男（言語社会研究科修士課程）　・・・・・・・・・・・・・・ 15

博士後期課程から学芸員資格に取り組み気づいたこと
市村 有樹子（社会学研究科博士後期課程）　・・・・・・・・・・・・・・ 16

キャンパスとミュージアム　地元・横浜への三角測量
奥津 憲聖（横浜みなと博物館学芸員）　・・・・・・・・・・・・・・ 17

ご挨拶

尾方　一郎（一橋大学言語社会研究科長）

本日は一橋大学言語社会研究科が主催する当公開講座にお越しいただき、大変ありがとうございます。

当研究科では、2002 年度から学芸員資格を取得するためのプログラムを開設しました。一橋大学というと、商業関係を中心とした大学というイメージが一般的で、その中でなぜ学芸員なのかと思われるかもしれません。しかし、博物館のシステムを支える根本的な志向、あるいは人間の欲求とでもいうようなものは、商業の世界とも深くつながっていることがすでによく知られています。

そこにあるのは、世の中のモノを体系的に整理し、分類して、一望のもとに眺められるように展示すること、それによりたとえ一部の分野にせよ網羅的に見て知りたいという志向だと考えられますが、これがまさに、19 世紀にデパートという商業形態が生まれたときに応えようとしたものなのです。こうしてみても、人文学と商業を対象とするようないわゆる実学は深いところで結びついていることがご理解いただけるのではないでしょうか。

人文学を柱とする本研究科で学芸員養成プログラムを運営していることは、こういった点でも深い意味を持つことですが、一方で本研究科の掲げる教育目標の一つでもある、高度専門職業人の育成の役割も果たしており、さまざまな博物館や美術館への就職の実績も着実に出しているということは、その実際的な大きな意味だと言えましょう。

本研究科では、大学院生に人文学の深く高度な研究を求め、そのための環境を充分に提供できるよう日頃から努力していますが、そうした研究で培われた豊かな教養と専門的知識を備えた人々が、社会のさまざまな方面で活躍し、研鑽の成果を多様な形で結実させてくれることも、強く期待しています。そうした観点からしてこの学芸員養成のプログラムは、当研究科の教育活動の一つの大事な柱ともなっています。

またこの関連からいえば、このプログラムが対象を大学院生だけに限定しているのも大きな特徴と言えるかと思います。学芸員養成のためのプログラムは、通常はいわゆる学部生向け、学士課程に置かれることが多いものですが、ここで大学院生に対象を絞っていることは、まさに「高度」な専門職業人として巣立っていってほしいという願いが如実に現れているところです。

このように、すでに 15 年以上の歴史をもち、着実に使命を果たしてきている本研究科の学芸員養成のプログラムではありますが、通念として抱かれている一橋大学のイメージの中で、まだまだ充分に認知されているとは言えないところもあるでしょう。そうした中で、今回の公開講座を通して一橋大学の新しい一面を知っていただくだけでなく、博物館や美術館、そしてそれらを支える学芸員とその養成の仕組みについてもご理解を深めていただくことがかないましたら、私たちとしてこれにまさる喜びはありません。

言語社会研究科における学芸員養成の概要

小泉　順也（一橋大学言語社会研究科准教授）

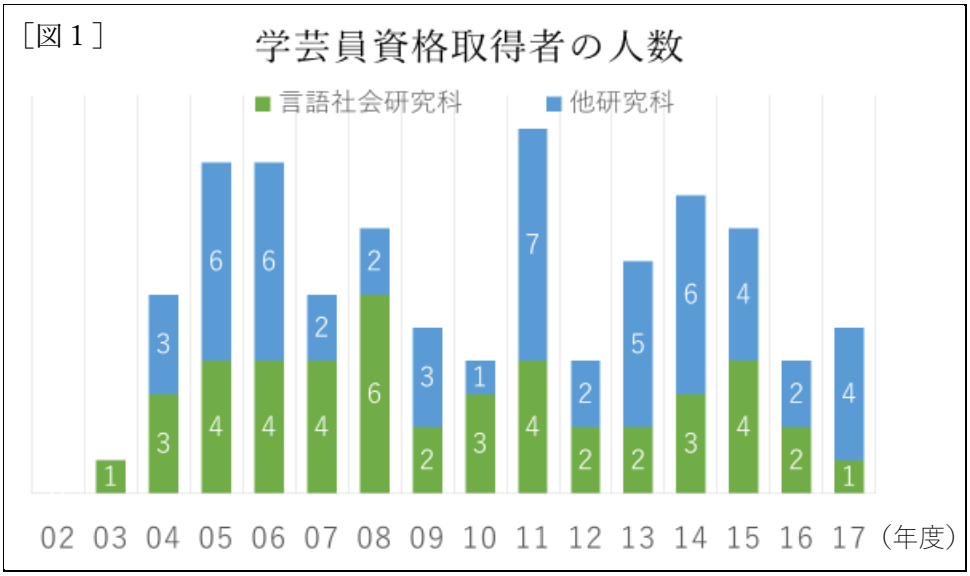
言語社会研究科は、学部を持たずに修士課程・博士後期課程のみを設置する独立大学院として1996年に設立されました。社会科学の総合大学を標榜する一橋大学にあっては、人文学の教育研究を任務とする唯一の研究科です。「言社研（げんしゃけん）」という略称で呼ばれることの多い研究科では、2002年度に学芸員資格科目を開講しました。現在は成城大学文芸学部教授である喜多崎親先生が、開講の前年に一橋大学に着任され、学芸員資格科目の立ち上げにおいて中心的役割を果たされました。それから15年以上がたち、2003年度から2017年度までに100人弱が学芸員資格を取得しています。そのうち、言語社会研究科の大学院生は約45%を占めています。

そして、最初の学芸員資格取得者が誕生した2004年から2018年6月までに、一橋大学大学院では計32人の大学院生がミュージアムに関連する分野に就職しました。そのうちの約8割は学芸員としての採用です。32人の内訳は美術館20人、博物館5人、文書館3人、科学博物館2人、文化振興に関わる財団2人となっています。ただし、資格を取得する途中で就職が決まる場合もあります。また、他大学の学部で学芸員資格を取得し、言語社会研究科に進学した後にミュージアムに就職した事例も3分の1ほど含まれています。美術館に就職した20人のうち、言語社会研究科の出身者は19人、博物館と文書館に就職した9人はすべて社会学研究科の出身者であり、研究科の特徴がそのまま実績に反映されています。

2008年度からは、学芸員資格にマネージメント、マーケティング、知的財産権などの基本的な授業を組み合わせた、MAP と呼ばれるミュージアム・アドミニストレーション・プログラムを開始しました。ミュージアム運営のノウハウを備えた学芸員養成を目指すという理念に基づく教育は、今振り返っても先駆的な内容を含んでいます。2012年度から修得すべき博物館に関する科目が8科目12単位から9科目19単位に増えました。この博物館法施行規則の一部改正によってプログラムは役割を終えましたが、その試みは評価に値します。

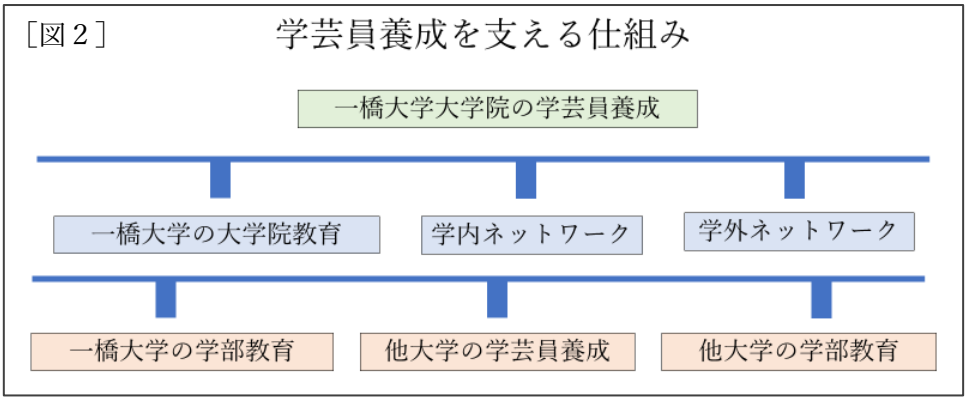
昨今のミュージアムは厳しい環境に置かれています。こうした状況下で大学院生から学芸員資格を目指すという状況は、遅すぎると考える向きもあるかもしれません。しかし、将来の職業選択に対する明確な意識、学問的な専門性を備えた段階であるからこそ、そこでは主体的な学びが実践できているのです。授業においては、少人数ならではのきめ細やかな指導が実現しています。そして、人文社会科学という一定の枠組みを保ちながらも、多様な分野を研究する履修者が集うことで、新たな交流や知的創造が生まれています。現在、学芸員資格の取得要件を大学院修士課程の修了レベルにまで引き上げるという議論が一部でなされています。大学院生に対象を限定した学芸員養成を日本で行っているのは、調べた限りにおいて、おそらく本学が唯一の機関です。言語社会研究科におけるこうした試みは、21世紀の日本における学芸員養成の新たなモデルとなる可能性を秘めているのです。

［図１］

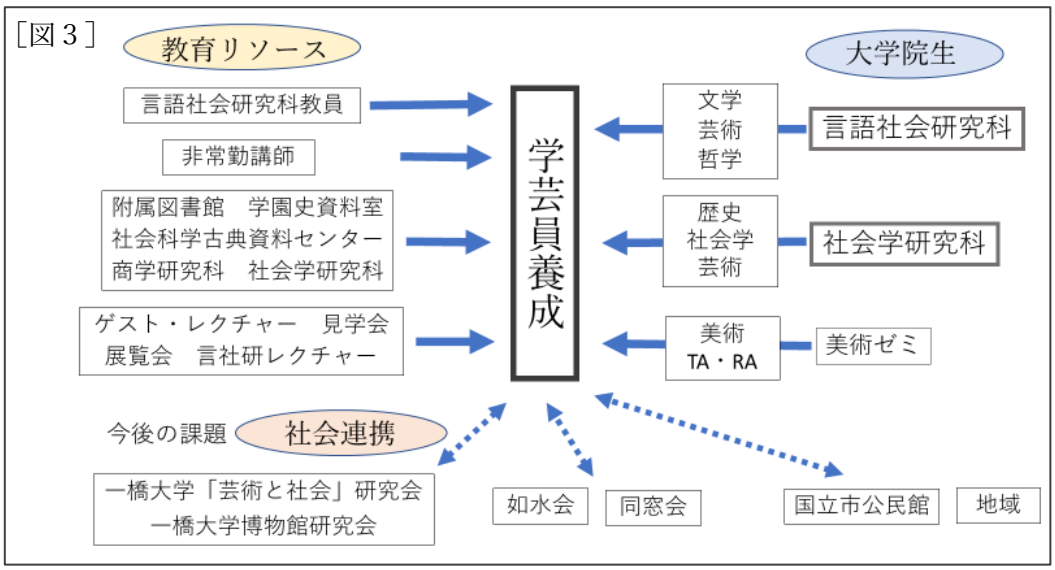


（注）学外の博物館実習（館園実習）で単位を取得した人数を集計したデータ。

［図２］



［図３］



一橋大学大学院言語社会研究科

学芸員資格科目担当教員一覧（2002年度～2018年度）

年度	博物館学Ⅰ	博物館学Ⅱ	博物館学Ⅲ	視聴覚教育メディア論	教育と社会	教育学概論(1)
2002	喜多崎親	喜多崎親	寺島洋子	和田正人	関啓子	北村和夫
2003	喜多崎親	喜多崎親	寺島洋子	和田正人	関啓子	木村元
2004	喜多崎親	喜多崎親	佐々木秀彦	和田正人	久冨善之	関啓子
2005	喜多崎親	喜多崎親	佐々木秀彦	和田正人	中田康彦	関啓子
	博物館学Ⅰ	博物館学Ⅱ	博物館学Ⅲ	視聴覚教育メディア論	教育と社会	教育学概論
2006	喜多崎親	喜多崎親	寺島洋子	和田正人	藤田和也	（開講せず）
	博物館学Ⅰ	博物館学Ⅱ	博物館学Ⅲ	視聴覚教育メディア論	教育と社会	教育学概論
2007	喜多崎親	喜多崎親	寺島洋子	和田正人	久冨善之	関啓子
2008	志邨匠子	喜多崎親	端山聡子	和田正人	関啓子	北村和夫
2009	喜多崎親	喜多崎親	端山聡子	和田正人	中澤篤史	北村和夫
2010	喜多崎親	喜多崎親	寺島洋子	和田正人	山田哲也	北村和夫
2011	喜多崎親	喜多崎親	寺島洋子	和田正人	木村元	北村和夫
	博物館概論	博物館資料論	博物館展示論	博物館資料保存論	博物館教育論	博物館経営論
2012	小泉順也	小泉順也	小泉順也	筒井弥生	端山聡子	林容子
2013	小泉順也	小泉順也	長谷川珠緒	筒井弥生	寺島洋子	林容子
2014	小泉順也	小泉順也	長谷川珠緒	筒井弥生	寺島洋子	林容子
2015	小泉順也	小泉順也	長谷川珠緒	筒井弥生	寺島洋子	林容子
2016	小泉順也	小泉順也	米崎清実	筒井弥生	寺島洋子	林容子
2017	小泉順也	小泉順也	米崎清実	筒井弥生	寺島洋子	林容子
2018	小泉順也	小泉順也	大橋菜都子	筒井弥生	端山聡子	林容子

・毎年発行される『学生便覧』に記載された担当教員は、その後に変更される場合がある。一橋大学学務情報システム・学生ポータル（MERCAS）は2002年度の情報まで遡ることができない。2018年度の秋冬学期の開講科目は担当予定の教員を記入している。

（作成：2018.6.12）

博物館実習					年度
（開講せず）					2002
喜多崎親					2003
喜多崎親					2004
喜多崎親					2005
博物館実習Ⅰ	**博物館実習 II（通年）**				
喜多崎親	喜多崎親				2006
博物館実習Ⅰ	**博物館実習Ⅱ（通年）**	**MAP 演習 (2)**	**MAP 演習**		
喜多崎親	喜多崎親	喜多崎親	喜多崎親		2007
喜多崎親	喜多崎親	志邨匠子	喜多崎親		2008
喜多崎親	喜多崎親	喜多崎親	喜多崎親		2009
喜多崎親	喜多崎親	喜多崎親	喜多崎親		2010
志邨匠子	喜多崎親	林容子	林容子		2011
博物館情報・メディア論	**教育と社会**	**博物館実習Ⅰ**	**博物館実習Ⅱ**	**博物館実習Ⅲ**	
出光佐千子	中田康彦	志邨匠子	小泉順也	小泉順也	2012
杉山菜穂子	山田哲也	増野恵子	小泉順也	小泉順也	2013
杉山菜穂子	山田哲也	増野恵子	小泉順也	小泉順也	2014
杉山菜穂子	木村元	増野恵子	小泉順也	小泉順也	2015
鈴木親彦	山田哲也	増野恵子	小泉順也	小泉順也	2016
鈴木親彦	木村元	増野恵子	小泉順也	小泉順也	2017
鈴木親彦	中田康彦	増野恵子	小泉順也	小泉順也	2018

(1) 教育学概論は読み替え後の授業科目である。

(2) MAP とはミュージアム・アドミニストレーション・プログラムの略称。厳密な意味における学芸員資格科目ではないが、関連科目として記載した。

一橋で学芸員？　設置の経緯と独自性の模索

喜多崎　親（成城大学文芸学部教授）

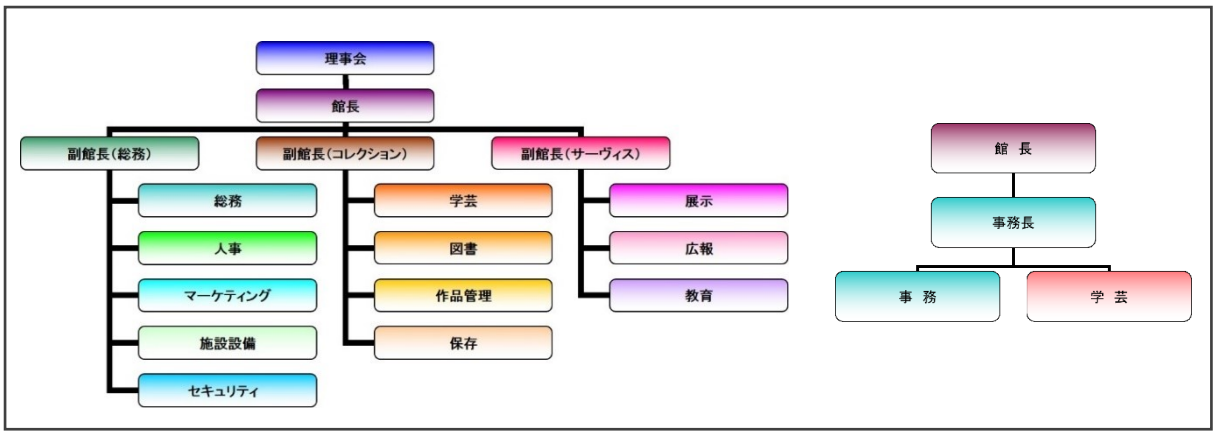
昨年ある大臣が「学芸員なんていらない」と発言しました。文化財を観光資源として活用しようとするアイデアを学芸員が阻害するという趣旨でした。しかし学芸員というのは、美術館や博物館（ここでは総称してミュージアムと呼びます）が、文化財を研究や鑑賞、楽しみのために活用できるように、収集・管理・活用する専門職として、文化財を守る社会的な使命を担っています。国はそのために学芸員資格を設け、大学において一定の科目を修めることで認定しているのです。

一橋大学では長らく学芸員資格を取得することができませんでした。しかし、美術や歴史について学ぶ学生はいて、学芸員資格を取得できることは潜在的には求められていました。私は、2001 年 4 月に、国立西洋美術館の研究官から一橋大学大学院言語社会研究科の教員になりましたが、そのときには専門である美術史を教えるだけでなく、学芸員資格取得課程を作るということが求められました。この課程はふつう学部に設けられるのですが、一橋ではあえて大学院に設置しました。これは学芸員に高い専門性が求められることから、実際には修士以上でないとなかなかミュージアムに採用されないという現実に即したものです。

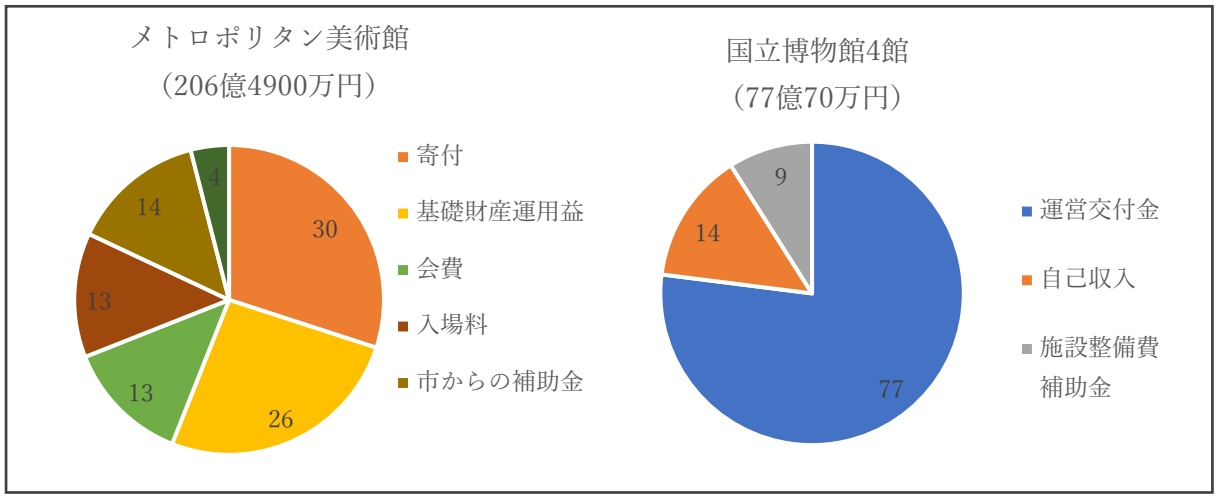
ただ、学芸員は実は研究だけ出来ればいいというものではありません。作品や資料の特性を知り、その扱いをマスターし、展覧会などの企画を立て、作品貸与の交渉や展示具を検討し、教育普及活動もやらなければなりません。これはいわゆる座学だけではどうにもなりません。学芸員資格の科目には、実習もありますが、それをより充実させる意味で、外部のミュージアムと連携するということを考えましたが、その中で顕在化したのが、一橋としての「うり」は何かという問題でした。

そこで生まれたのが、ミュージアム・アドミニストレーション・プログラム（通称 MAP）です。当時国公立のミュージアムも独立行政法人化や指定管理者制度によって、その運営が問われていたので、学芸員を目指す学生に、ミュージアムを運営するためのマネージメントについても学べるようにしたらどうかと考えたわけです。学部の授業を大学院生も履修できるという既存の制度を使い、商経法社の学部の授業から一定のものを選択して、2007 年にプログラム化しました。また、2009 年からはミュージアムや美術に関連する企業のインターン制度を積極的に推奨するために、それを大学院の修了要件として単位化する試みも始めました。こうして学芸員資格を持つ学生に一橋ならではの付加価値を付けたわけです。

これらが、実際にどのくらいの効果があったのかは判りません。というのも、学芸員資格についての文部科学省令が改訂され、2012 年から履修しなければならない科目数が増やされて MAP との併存が難しくなり、また 2010 年から私自身も現在の職場に移動することになったからです。ただ、私がいた 10 年間に、言語社会研究科・社会学研究科を合わせ、少なくとも 10 名の学生が学芸員になりました。一橋で学芸員資格を取得した学生数と比べれば、これがきわめて高い割合であることは事実です。



［図 1］博物館学 II のスライド例：欧米（左）と日本（右）のミュージアム組織



［図 2］博物館学 II のスライド例：2007 年（度）のメトロポリタン美術館と独立行政法人国立博物館 4 館の収入内訳の比較

［図 3］「ミュージアム・アドミニストレーション・プログラム」を紹介するチラシ

「放牧地」で学んだこと

成相　肇（東京ステーションギャラリー学芸員）

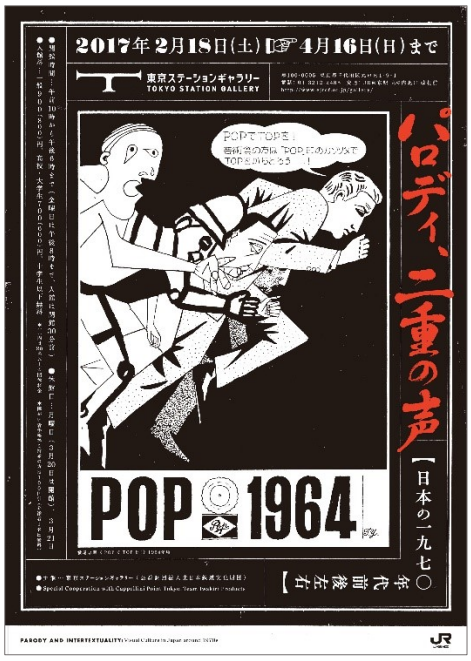
日本のいわゆる現代美術を主なフィールドにしながら、そこに紐づいた漫画、広告、テレビといった周縁的な視覚文化を含む表現領域について、調べたり話したり書いたり展覧会にまとめたりしています。モダニズム美学からこぼれた、もしくは目を背けられてきたような、人々の暮らしと恥ずかしいくらいに密着した種々の文化――昨今注目を浴びている言葉を使えば vernacular（土着的、日常生活に根差した）な文化――を美術館の中に連れ込んで（美術作品は外に連れ出しがたいので）併置することで、生活の地平で美術をつかまえたい、そして展覧会という形で新たな空間をつくって楽しみたいと考えています。

こんな、いわば野蛮な、雑種的な関心を培った経緯はさまざまに思い浮かびますが、重要な要因のひとつに、僕が少なくとも学部の間はアカデミックな美学・美術史教育にほとんど触れずにいたことがあるはずです。一橋大商学部在学中にただ唐突に美術に興味を持ったまま卒業した僕は、喜多崎親先生のご尽力でその年から運良く学芸員資格が取得可能になったことに乗じて進学し、喜多崎ゼミに入れていただきました。そうしてたまたまこの大学院卒の学芸員一期生になるのですが、商学部にいながら手探りで散発的に美術らしきものに接していた発端からして、自分にとって美術は特権的な対象でなく、音楽や映画やファッション、ゲームやテレビ、あるいは落語とか異性とかお酒とか焼き鳥とかとほとんど並列で、むしろその価値に懐疑的なくらいであったように思います。

このまだらな関心が、ゼミに入るとまだらなまま金平糖的に拡張することになりました。美術専門のゼミはここだけなので、研究対象に大きな幅がある学生が、それこそ雑種的に集まっていたからです。先生のご専門の 19 世紀フランス研究者はたしか僕の在籍時にはたった一人で、ミュゼオロジー、フェミニズム、建築、ダンスと多岐にわたるゼミ生が順繰りに研究経過を発表する基本的な指導方針――これを先生は「放牧」と呼んでいました――においてクロスオーバーする質問や議論はつねに刺激的でした。建築研究に対して果敢に突っ込むダンス研究者の意見をつなごうと思案する現代美術研究の僕、というあの異種格闘技めいた放牧地の知的興奮に今も支えられています。そういえば、大学のある場所も「国立」なる雑種的地名でした。

ところで、学芸員課程で学ぶ博物館法で僕が最も好きなのは、まさしくその雑種性です。「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等」、「実物、標本、模写、模型、文献、図表、写真、フィルム、レコード等」といった法文にある羅列は、一面では専門性のゆるさと同義でありつつ、広大な分野をカバーするミュージアム元来の貪欲さそのものを現しています。僕はそのような、現代では細分化しているミュージアムの根にある貪欲さをいかに形にするかということばかり考えているような気がしますが、そのような発想も、今の自分の仕事や問題関心も、源泉は確実に学生時代の経験に由来していると思います。

「石子順造的世界：美術発・マンガ経由・キッチュ行」
府中市美術館　2011 年 12 月 10 日～2 月 26 日



「パロディ、二重の声：日本の一九七〇年代前後左右」
東京ステーションギャラリー　2017 年 2 月 18 日～4 月 16 日

大学と美術館の往来

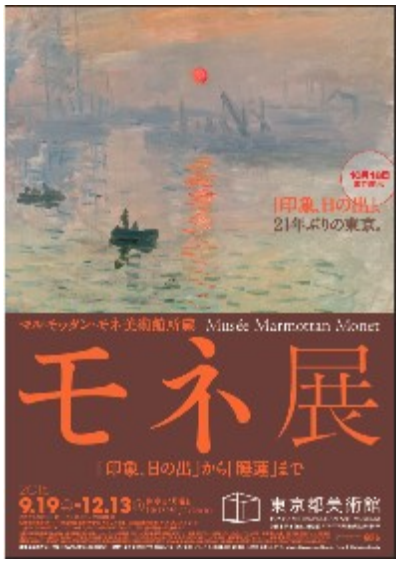
大橋　菜都子（東京都美術館学芸員）

フランス近代絵画を学びながら学芸員を目指していた私は、2006 年 4 月、喜多崎先生の教えを乞うべく言語社会研究科の修士課程に入学しました。修士論文を執筆中の 2008 年秋に学芸員として職を得て以降、小泉先生のご指導を受けながら 2016 年 3 月にようやく博士課程を満期退学するまで、いくどかの休学を挟みつつではありますが、大学と職場を行き来する生活をつづけました。

資格を学部で取得していたにも関わらず、大学院で再び学芸員資格に関わる講義を受講したのは、最初は MAP（ミュージアム・アドミニストレーション・プログラム）の一環でした。MAP は、今はなくなってしまいましたが、他大学から進学した者にとって、とても一橋大学らしい魅力的なコースでした。演習のほか、商学部の学部生に交じって経営戦略論やマーケティング・コミュニケーションなども受けることとなり、それまで縁のなかった学生や講義に出会うことができました。演習は大学院の学生のみでしたが、美術以外の専門の学生と多くのディスカッションを重ねたことは、刺激的な経験でした。

現在は、主にフランス近代絵画を扱う展覧会を担当していますが、振り返ると、学芸員として職を得ることができたきっかけは、大学院時代のインターンシップでした。新聞社の文化事業部での展覧会運営のほか、都立の主な文化施設を管理・運営する公益財団法人東京都歴史文化財団の事務局にて、顧客満足度調査を学ばせていただきました。美術史とは少し距離のある職種ではありましたが、こうしたインターンシップに関心をもつに至ったのは、MAP を受講していたことや、さまざまな専門の学生と出会うことのできた大学院の雰囲気が大きかったように思います。広い視野で美術館のあり方を考えることが求められ、事務系の職種への異動のある今の職場では、こうした点も評価いただいたと考えています。

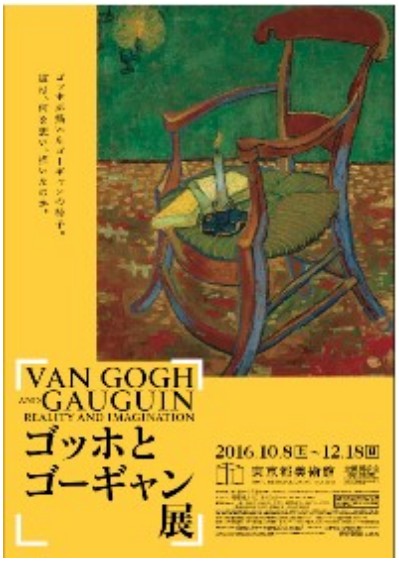
運よく修士課程の途中で学芸員として職を得ることができましたが、研究者としては中途半端なまま社会に出ることともなりました。就職後の二度目の履修は純粋に単位取得のためでしたが、大学院という場だからこそ、美術史をつづけながら、同時に美術館のことを学び直し実際の現場に生かすことができました。目の前の仕事に追われがちな実際の学芸員としての仕事と、外側から美術館、展覧会や学芸員が客観的に語られる大学院の講義。その時間は、現場で直面するさまざまな課題とあるべき姿とのギャップを痛感しながらも、ただただ眼前のことにのみとらわれそうになる自分を、どうにか留めてくれたように思います。学芸員として働きながら、博士課程に在籍していた、あるいは退学されても博士論文を目指し研究をつづけていらした先輩方の姿は、大きな励みとなりました。さまざまな学生のいる場で、現場を意識しながら学びつづけられた時間は、確かに現在の仕事の糧になっています。



撮影　加藤翔

「マルモッタン・モネ美術館所蔵　モネ展」
東京都美術館　2015 年 9 月 19 日～12 月 13 日

撮影　大谷一郎



「ゴッホとゴーギャン展」
東京都美術館　2016 年 10 月 8 日～12 月 18 日

学芸員養成における混在と対等の地平

小泉　順也

喜多崎親先生のあとを引き継ぐかたちで、私は 2012 年度から一橋大学大学院言語社会研究科で学芸員資格科目に関わる諸々の仕事を担当しています。題目に学芸員養成と書きましたが、課程やコースがあるわけではなく、必要とされる学芸員資格科目を提供しているだけというのが実態に近い表現でしょう。これらの科目を開設して 15 年以上の年月が流れましたが、大学院という制度の片隅でこぢんまり店を広げているような状況が続いています。それでも、気が付くと案外と魅力ある個性的な店構えになってきたと思います。

着任した当時を振り返ると、博物館概論の授業での当惑と言ってもよい驚きは忘れられません。受講者は 12 人ほどでしたが、そこには都心の美術館に勤務する 2 人の「学芸員」の顔がありました。事情を聞くと、資格は取得済みであるが、この授業は修了要件に含まれるので履修したいとの回答でした。何ともやりにくくて困りました。しかし、彼らに話をしてもらえば、現場の声をそのまま受講者に届けるかたちになります。私の立場からしても、通り一遍ではない内容を求められ、プレッシャーを感じながら授業の準備にあたりました。

私のもともとの専門分野は西洋美術史で、大学院における初年度の指導学生は 15 人ほどいました。互いに選んだわけでも選ばれたわけでもない、微妙な人生の出会いというのは不思議なものです。彼らの大半は他大学の出身で、学部時代に学芸員資格を取得していました。そのため、美術を研究する大学院生は多いものの、この時期はすべての学芸員資格科目を履修するケースは少なかったのです。

一橋大学で学芸員資格科目を受講する院生の所属は複数にまたがり、専門分野も歴史、芸術、文学、哲学、社会学など多岐にわたっています。そして、博士後期課程に進学してから履修を始めることも珍しくなく、ときに留学生も含まれるというような多様性は大きな特徴です。ところで、修士課程と博士後期課程の院生は、どちらも学芸員資格を取得するという目的は同じであり、その意味において対等な関係が成立しています。知識や経験の差による序列をほとんど生まない環境は、受講者にとっても居心地がいいようです。分野や学年を超えた活発な議論は日常的に行われています。それまで内緒にしていた個人的な趣味を課題発表で取り上げるときなどは、授業が意外な盛り上がりを見せることがあります。

つまるところ、一橋大学大学院の学芸員養成は、専門分野を超えた各人の興味のありようを受け止め、個人の意見を自由に述べられる場になっているように思います。こうした環境は経歴の異なる非常勤講師の先生方によっても育まれています。現代の博物館や博物館学は一つのモデルを提示するだけでは不十分です。受講者や教員が持っている一定の多様性は、異なる立場や専門性を対等に扱う土壌を生み出しています。本学から日本各地のミュージアムや関連機関に巣立った出身者は、一つの型には収まらない個性を備えています。今回の公開講座をきっかけとして、その活躍に目を向けていただければ幸いです。

［図 1］博物館実習 II（学内実習）展示課題発表　2014 年 12 月 12 日

［図 2］博物館実習 II（学内実習）展示課題発表
2017 年 12 月 5 日　保坂瞳さん

［図 3］展覧会チラシ作成課題
2013 年度　佐々木悠希子さん

留学生の視点から見る学芸員資格科目

趙　亜男（言語社会研究科修士課程）

平成 29 年 4 月に言語社会研究科修士課程に入学して以来、学芸員資格科目を毎学期履修してきました。現在も履修中で、未履修の科目は 3 科目残っていますが、修士課程に在学している間に全科目を履修し終える予定です。一橋大学に入学する前から日本の茶文化や茶道具に興味を持っていたため、博物館で開催していた茶の湯の展覧会を見に行ったこともあります。そのころは日本における学芸員資格システムについてはよく知らなかったため、その取得について考えたこともありませんでした。入学説明会でいただいた『学生便覧』のなかの学芸員資格科目について見ていたときは、博物館に関わる科目だという表面的な理解しかしていませんでしたが、資格、茶道具などに関する知識を得ようと思い、履修を始めました。諸先生方からご配慮をいただき、これまで受講した科目の単位を無事に取得することができました。

大学院で私が取っている多くの授業と異なり、資格の授業は担当している先生方の講義だけにとどまらず、ときには現役学芸員の方によるゲスト講演会を聞いたり、博物館へ見学に行ったりすることもあります。留学生の私にとって、現役学芸員の方のお話を聞いたり、博物館に授業で訪れたりすることは初めてで驚きました。後に提出するレポートや模擬展示の発表などは完成させることに大変苦労しました。今までは博物館というと見学者の立場しか経験したことがなかったのですが、学芸員科目の履修を通し、展示を企画する視点を得ることもできました。すると、博物館で行われている展覧会の研究的側面も見えてきたため、研究における博物館資料の活用の可能性と価値について考える機会も得られました。また、先生方だけではなく、一緒に受講していた学生の皆さんの専攻分野が多様なため、その方たちが持っている新しい考え方に触れる機会もありました。その一方で、自分の視野の狭さを感じる瞬間がたくさんありました。そのため、昨年度は心細い気持ちを持ったまま修士一年目を過ごしてきましたが、授業のなかで出された同じ課題について、学生たちが見出した観点は多様なもので、私はそこで得られた学際的視点の魅力に惹かれるようになり、学芸員資格科目を全科目修了して学芸員資格を目指そうと思うようになりました。

実際、私も含めて周りにいる留学生たちは、学芸員資格科目に関する認識が乏しいようです。一つの資格を取得できるというメリットがあるにもかかわらず、専攻分野に関係がないと思ってしまったり、留学生であるため、日本の博物館に学芸員として就職できないのではないかという懸念を持ったりと履修を断念する人も多いそうです。しかし、もともと美術と無縁だった私ですが学芸員資格科目の履修を通じて、文献史料の使用に制限されていた茶文化研究の資料範囲を現存美術品まで広げて、研究内容の具現化と現代的な意味を明らかにすることを実現したいと考えています。現在の専攻分野と将来就きたい職業が何であろうとも、自分の視野を広げようと意識をすることが大切なのではないかと考えています。

博士後期課程から学芸員資格に取り組み気づいたこと

市村　有樹子（社会学研究科博士後期課程）

原子力という言葉からミュージアムという言葉をすぐに連想される方は、あまりいらっしゃらないかも知れません。しかし、以前からわたくしは、広島や長崎に落とされた原爆や、ビキニ環礁で起きた第五福竜丸事件、JCO 臨界事故などの原子力科学技術に関する事件や、それらを展示する博物館について強い関心をもっていました。そして、いまから約 7 年前の 2011 年 3 月に東京電力福島第一原子力発電所事故が発生し、いまだかつてない規模の住民避難が実施されました。この避難の様子を報道を通して知ったのですが、原発周辺自治体を含む住民避難の対策が、十分になされてこなかったことに疑問を持つようになりました。

修士課程の研究では、これらの関心をもとに東京電力福島第一原子力発電所事故と日本の原子力発祥の地・茨城県東海村で発生した JCO 臨界事故を扱いました。これら 2 つの事故を通し、原子力推進派から反対派へと考えを大きく転換させた東海村元村長・村上達也氏へインタビューを行い、原子力災害における住民避難に関する修士論文を執筆しました。

本来、専門家や政策担当者は、自身の専門分野の視点だけに囚われず、原子力の危険性を多面的に捉え、政策などに生かせる総合力をもっているべき存在です。しかし、修士論文の執筆を通し、現状は程遠いものだったということを知りました。そして、自然科学や社会科学のように大別される異なる分野の専門家の間でこそ、それぞれの分野で得られた研究成果を分かりやすく提示し合い、広く社会に知らせることも必要だと感じました。

アカデミズムで行われる発表は、学会や学術誌を通じて研究成果を紹介するため、専門が異なる研究者やアカデミズムとの接点がない方に対し、その成果を提示することは難しいものです。また研究成果を社会に広く認識してもらう発表手段としては、裾野が狭いものであるとも言えるでしょう。

ミュージアムの展示は、学術的な研究成果を視覚的に見せるダイジェストな展示であり、さまざまな方を対象にする理解しやすいものです。また、意見が分かれ、短期間では結論が出せないオン・ゴーイングの事柄であっても、展示の段階ごとで多様な見解があるということも、分かりやすく紹介することが可能です。

大学などを中心に、従来から行われてきた学術研究発表も、ミュージアム展示のような発表形式を併用するようになると、専門が異なる研究者や普段はアカデミズムから離れたところで暮らしている方にも、研究成果を知っていただける機会を増やすことができます。その結果として、アカデミズムとの接点がない方からも、研究成果に対するフィードバックを得られ、より多面的で総合的な研究が行えるようになります。また賛否が分かれるようなテーマを扱う場合にも、多様な議論の場を提供する知の実践にも繋がります。それらを実現させるには、学術発表形式と博物館展示形式を併用し、自身の研究分野で得られた研究成果の発表を行う学芸員の存在がますます重要になると言えるでしょう。

キャンパスとミュージアム――地元・横浜への三角測量

奥津　憲聖（横浜みなと博物館学芸員）

小学校から高校まで横浜の公立校に通い、出身大学のキャンパスも神奈川県内にあった私にとって、東京・国立に通学した 2 年間は特別な時間でした。私の研究テーマは横浜のまちづくりです。横浜市は 1960 年代から 80 年代にかけて、横浜駅周辺地区や関内地区、その間に位置するみなとみらい 21 地区といった都心臨海部の再開発に力を入れて取り組んできました。私は、行政が主導した横浜の都市づくりに、視覚伝達デザインの専門家であるグラフィックデザイナーがどのような形で関わったのか、という問いを立て、学部時代から修士課程にかけて研究を続けてきました。私は現在、みなとみらい 21 地区に立地する横浜みなと博物館に学芸員として勤務していますが、東京・国立という場に身を置いて、研究対象であり、自らの立脚点でもある横浜と向き合った経験は日々の業務にも生きていると感じています。

私が大学院で得た大きな収穫は、社会学研究科でアカデミックな雰囲気に触れられたこと、そして、学芸員資格科目の履修を通じて博物館・美術館が担う役割を意識できるようになったことの 2 点です。所属した社会学研究科では、学術書を精読することや、研究成果を論文としてアウトプットすることなど、社会学ひいては人文・社会科学の研究者としての基礎的な研究の進め方を学ぶことができました。一方、学芸員資格科目では社会教育施設として博物館が担う役割を学び、博物館も日々の活動を通じて、学術的な研究成果を社会に還元していることを知ることができました。私は今も、キャンパスとミュージアムという 2 つの基点を意識しながら、自らの研究者としての立ち位置を探っています。

しかし、修士課程の 2 年間で学芸員資格科目を取得するためには、かなりの覚悟も必要でした。当初、指導教員には修了要件に算入されない学芸員資格科目を多数履修することについて反対されました。大学院、特に修士課程においては所属研究科の設置科目を履修し、修士論文を書き上げることが大前提です。私はその前提を理解していること、それでも学芸員資格を取得したいという強い思いを持っていることを伝えることで、許可をもらうことができました。このように社会学研究科での学修と、学芸員資格科目履修の両立は大変でしたが、同科目の授業は非常に有意義で、大きな学びにつながったと感じています。授業はいずれも 2〜6 人程度の少人数制で、教員との対話形式によって授業が進められるので、1 回あたりの内容が濃密でした。特に都内の美術館に勤務する現役の学芸員の方々からは実務に即したお話を伺うことができ、貴重な経験となりました。

横浜で学芸員として働き始めて 1 年が経過しましたが、不足しているスキルや知識はまだ多いと感じています。しかし、一橋大学大学院で学芸員資格科目を履修したことは 1 つの自信となっています。これからも全国の博物館・美術館の動向を意識しつつ、横浜の博物館の学芸員だからこそできることに挑戦していきたいと考えています。

平成30年度　一橋大学公開講座

ミュージアムへの招待　大学院から始める学芸員資格

発行日　　平成30年6月23日
発行所　　一橋大学大学院言語社会研究科
印刷・製本　一橋大学附属図書館
編　集　　小泉 順也

〒186-8601
東京都国立市中2-1 一橋大学大学院言語社会研究科
TEL : 042-580-9019
FAX : 042-580-9016